

風見幽香の
**幻想郷
開発計画**

・市民のための経済学の基礎・



風見幽香の幻想郷開発計画

市民のための経済学の基礎

発行：2014年5月11日（第11回博麗神社例大祭）

著：後藤和智（後藤和智事務所 Offline）

表紙イラスト：一代太佐（世は並べて事も無し）

注意

1. 本書は、同人サークル「上海アリス幻楽団」の作品「東方Project」の二次創作作品です。本書は東方Projectの二次創作ガイドラインに従って製作されているものであり、また著者と原作者及び作者のサークルとは一切関係がありません。そのほか、登場人物の口調などが原作と異なる場合があります。
2. 本書を著作権法の定める私的使用の範囲外で公開などを行うことを禁じます。また、本書の使用により生じた問題についての責任は負いかねます。

0.1 まえがき

——紅魔館のとある客室にて。

れいせん うどんげいん
鈴仙・優曇華院・イナバ（以下、鈴仙）：…で、咲夜さん、あたしらをここに呼びつけて、一体何を行うっていうのよ。

いざよいさくや
十六夜咲夜（以下、咲夜）：別に私が呼んだわけじゃないわよ。まあ主催者がこの紅魔館でやるってことで私が差出人にはなったのだけど。

こんぼくようむ
魂魄妖夢（以下、妖夢）：招待状読みましたけど、主催者って、太陽の畑を拠点としてる、あの風見幽香さんですよ…。

咲夜：そういうことになっているわね。ただ依頼を受けたのは魔理沙からだけど。

鈴仙：魔理沙と幽香か。一体何を企んでるんだろ…。

咲夜：魔理沙から聞いた話によると、何でも幽香さんが私たちに対して経済学の講義をしてやりたいとかいうことらしいわよ。どういう風の吹き回しなんだか…。

かえんびょうりん
火焰猫燐（以下、燐）：経済学ねえ。正直、あたしそういうの苦手なんよ…。単にお金に関するものが苦手っつーよりも、なんかこう、計算とかそういうのが関わってくるのがさ。

妖夢：私も同感です。前に幽々子様から生命保険数学の話聞いたとき*1なんてほとんど話がわからなかったですし。まあ数列とか少し知ってたからちょっとはついて行けたんですけど…。

鈴仙：あたしは一応師匠の教えを聞く傍らでいくつか学問にも触れてて、経済学もちょっとは知ってるけど、系統的に学んだってのはあんまりないなあ。まあこれを機会に学んでみるっていうのもありかもしれないかな。

咲夜：私は一つの教養としての程度には経済学はたしなんでいるわ。もっとも今回幽香さんがどうい話をするのか次第では対応を変えざるを得ませんけど。

鈴仙：すごいなあ。咲夜さんってそういうのも心得てるんだ。伊達に完全で瀟洒な従者の異名は取ってないっていうか。統計学もここのお嬢様に教えられる程度には心得てるみたいだし*2。

きりさめまりさ
霧雨魔理沙（以下、魔理沙）：待たせたな。講師様のお出ましだぜ。

かざみゆうか
風見幽香（以下、幽香）：ふふっ、みんなお揃いのようなね。今回は私のために集まってくれて嬉しいわ。

咲夜：幽香さん、私たちを集めて、いったい何をするつもりなのでしょう。もし何か危険なことがあるのでしたらすぐに排除いたしますが、いつでも準備はできていますわ。

幽香：あらあら、咲夜ちゃん、ナイフとか持ちちゃったりして、そんな物騒なことはやめにしてほしいわ。あなたは魔理沙から説明を聞いていると思うけれど、私はあなたたちに対して経済学の講義をしただけよ。

咲夜：はあ。ただ、なぜあなたが経済学を？

幽香：経済に関する知識は、何も経済政策とか投資とかをやるときだけに役立つものではないわ。例えば何らかのビジネスをやるにしても、需給や利潤の理論などを知っておくとよりよい発想ができるかもしれないし、労働者の側に立つにしても景気と労働需要の関係を知っておけば、経済政策に対する発言の説得力も増すものよ。ところが、経営側にしても、あるいは労働者側にしても、経済学の知見が反映されているとはいえないわ。経済に関して変な誤解を持ったまま展開される議論に、果たしてどれほどの説得力があるかしら？ だからこそこの私があなたたちに経済学の重要性を講義してやるのよ。感謝なさいな。

燐：はあ。しかし、なんでこの御仁はこう癪に障るような言い方をするかねえ。

幽香：何か言ったかしら？

燐：いいえ、減相もないっす、ははは…。

魔理沙：幽香、とりあえず説明を終えたところで、読者の皆様への挨拶も頼むぜ。

幽香：あら。すっかり忘れていたわ。というわけで、このたびはサークル「後藤和智事務所 OffLine」の40冊目の同人誌を手にとってくれてありがとう。本書の主たる目的は先ほどこの参加者の方に言ったから二言はしないわ。でも、今の「思想」や「批評」などの論客と言われている人たちにおける経済学に対する認識の不足や、あるいは一部の解雇規制緩和論の論客における「市場」への過度な妄信などを見るにつけ、「経済」というものに対してあまりにも両極端な認識が展開されていて困ったことなんてないかしら。そういう人たちに差をつけろ、というわけではないのだけど、経済に関する正しい知識は、労働にしろ社会保障にしろ、人の営みに関わるあらゆるものを考える上で極めて有益になるものよ。

魔理沙：ある種の若者擁護論として「今の若い世代は経済成長という価値観から脱却した世代だ」という議論がなされてい

*1 後藤和智『西行寺幽々子の生命保険数学基礎講座』後藤和智事務所 OffLine、2013年（第9回東方紅樓夢）

*2 後藤和智『改訂増補版 紅魔館の統計学なティータイム——市民のための統計学 Special』後藤和智事務所 OffLine、2013年（コミックマーケット85）

たりするが、そもそも若干の経済成長は再配分や社会保障などを円滑に回す上でも必要なもので、経済成長が止まったら今不利益な状態に置かれている人がさらに不幸な状態に置かれかねない。また、2000年代半ば頃以降の「新自由主義」批判からそもそも経済学そのものを敵視したりという動きもあつたりするが、学問というものはあくまでもツールに過ぎない。これらの思い込みからある程度脱却して、客観的に経済を考えられるようになる上でも、基礎的な経済学は必要だぜ。

幽香：本書は大別して3つの部分に分けられるわ。第1章では、経済に関する誤解を解きつつ、経済学の基本となる概念や簡単な数式について述べていくところよ。第2章から第4章にかけては、ミクロ・マクロ経済学における、数式やグラフを使ったモデルを説明するわ。そして第5章では、第1章から第4章までの知見を踏まえて、実際の経済に関する時事的な問題や経済政策について触れていく予定よ。

妖夢：基礎的なところから入ってくれるのは嬉しいです。正直私も不安がある分野なので是非ともいろいろなものを得て帰りたいですね。

幽香：それは嬉しいわ。

咲夜：というより魔理沙、本書の版元のサークルの講座系二次創作の動機って大抵似通ったものじゃない？

魔理沙：そう言われると身も蓋もないな…。あと、そういうのはあとがきの役目だから今は触れるな。

目次

0.1	まえがき	2
第 1 章	経済学の基礎	7
1.1	はじめに	7
1.2	経済学をめぐる疑問	7
1.2.1	経済成長はなぜ必要なのか？	7
1.2.2	大学の数は多すぎるか？学歴は無用か？	9
1.2.3	インフレとデフレ	10
1.2.4	「国の借金」で財政破綻はするのか？	11
1.2.5	経済学は「冷酷」か？	12
1.3	ミクロ経済学の基礎概念	12
1.3.1	経済学的な考え方とは？	12
1.3.2	インセンティブとは？	14
1.3.3	なぜ競争が重要なのか	15
1.3.4	比較優位	15
1.3.5	ゲーム理論の概要	17
1.4	マクロ経済学の基礎概念	19
1.4.1	マクロ経済	19
1.4.2	貿易収支	20
1.4.3	乗数効果	21
1.4.4	信用乗数	22
1.4.5	ケンプリッジ方程式とマーシャルの k	23
1.4.6	経済思想の基礎	23
第 2 章	ミクロ経済学 1：需要と供給	25
2.1	はじめに	25
2.2	需要曲線・供給曲線・均衡価格	25
2.3	余剰	27
2.3.1	最低賃金規制は雇用を減らすのか？	29
2.4	曲線の移動	29
2.4.1	需要曲線の移動	30
2.4.2	供給曲線の移動	32
2.5	部分均衡分析と一般均衡分析	33
2.6	独占	34
第 3 章	ミクロ経済学 2：消費者の理論	37
3.1	はじめに	37
3.2	効用と予算制約	37
3.3	予算制約線が変化すると…	40
3.3.1	需要の所得弾力性	40
3.3.2	需要曲線の作成	41
第 4 章	マクロ経済学	43

4.1	はじめに	43
4.2	マクロ経済の均衡	43
4.3	GDP の補足	45
4.4	IS-LM モデル	46
4.5	財政政策と金融政策	47
4.6	増税と公債の違い	49
第 5 章	経済政策・時事	51
5.1	はじめに	51
5.2	経済政策とは	51
5.3	ミクロ経済学の応用 1：間接税	53
5.4	ミクロ経済学の応用 2：市場の失敗	54
5.5	マクロ経済学の応用：インフレと失業	56
5.6	リフレッシュ政策	58
5.7	再分配政策	59
第 6 章	エピローグ/あとがき	61
6.1	参考文献	61
6.1.1	経済学概論・入門	61
6.1.2	経済政策・時事	61
6.1.3	経済思想	62
6.1.4	再分配政策	62
6.2	エピローグ——風見幽香の幻想郷開発計画？	63
6.3	あとがき	63

第1章

経済学の基礎

1.1 はじめに

幽香：というわけで始めるわ。みんな、心して聞きなさい。

魔理沙：まえがきでも述べた通り、本章の目的は、経済について語られがちな誤解を元に、経済学の基本的な考え方を解説するものだ。経済学にはミクロ経済学とマクロ経済学があり、家計や企業活動、及び個人の利益・便益などはミクロ経済学に属する。一方、金利や労働需要などといったものはマクロ経済学に属するものだ。

幽香：魔理沙からも少し触れられたけど、経済をめぐる議論は得てして誤解や妄信に基づくものも少なくはないわ。そういう誤解や妄信に対して、実際の経済学や経済統計などから改めて考えてみると、得てして滅茶苦茶なものであることが多いのよねえ。

妖夢：ただ、経済学による考えがすべて正しい、ってわけでもありませんよね。

幽香：もちろん経済学を過信するのも禁物だし、また経済学では扱えない問題も多くあるのも事実ね。でも、例えば古典的な経済学では、詳しくは後述するけど人の行動を「合理的」なものとしてモデル化して捉えているのに対し、そのようなモデル化では捉えられないような心理も考えるものとしての行動経済学や神経経済学*1などによってその間は解消されてきているわ。もう一つ重要なのは、これもあとで詳しく述べるけれどゲーム理論ね。

燐：…ああすいません、一つお伺いしますが、ゲーム理論って何すか…？ さとり様の読んでる本でちらっと見かけたことはあるんですけど、それっきりで。

咲夜：ゲーム理論とは、簡単に言えば「ある人の行動が他の人の行動に影響を及ぼすときの意志決定」に関する議論ですけど、後で幽香さんから詳しい話があると思いますので、その時を待ちましょう。

幽香：ありがとう、咲夜ちゃん。そういうわけだから詳しいことは後で話すとして、ゲーム理論は経済学だとミクロ経済学に該当するけれど、経済学のみならず政治学や心理学の場でもよく使われているから、知っておかないといろいろ大変なことになると思うわよ。

燐：そこまで大仰なことなのかねえ…。まあ、それは後で聞くとするか。

幽香：経済学に触れる上で心得ておかなければならないのは、これは『経済学大図鑑』（ナイアル・キシテイニー：著、若田部昌澄、小須田健：訳、三省堂、2014年）という本の帯に寄せられた岩井克人*2氏の言葉を借りることになるけど、途上国の発展も、100年に1度の大不況も、そしてポストモダン思想さえも、資本主義によって生まれたという厳然たる事実よ。資本主義は近年の様々な豊穡を生んでいるし、そして破滅も生んでいるわ。そしてその資本主義を読み解く最大のツールが経済学。その功罪はさておいても、豊穡の側面ばかり注目しては駄目だし、破滅の側面ばかり強調するのも同様に愚かなことと心得ておきなさいな。

1.2 経済学をめぐる疑問

1.2.1 経済成長はなぜ必要なのか？

幽香：まずは経済や経済学をめぐるよくある誤解や疑問について、経済学における理論や経済統計などをベースに解説していくわ。

鈴仙：経済をめぐる疑問って言うと、真っ先に上がるのが「経済成長は本当に必要なのか？」っていう議論だと思うんです

*1 行動経済学とは、合理的な「経済人」を前提とする既存の経済学に対して、実験や観察を元に行動やその結果を解き明かすもの。神経経済学とは行動経済学の一つの派生で、神経科学の視点から行動経済学を行うもの。

*2 Iwai, Katsuhito 1947- 経済学者。国際基督教大学客員教授、東京大学名誉教授。著書に『ヴェニス商人の資本論』『会社はこれからどうなるのか』など。

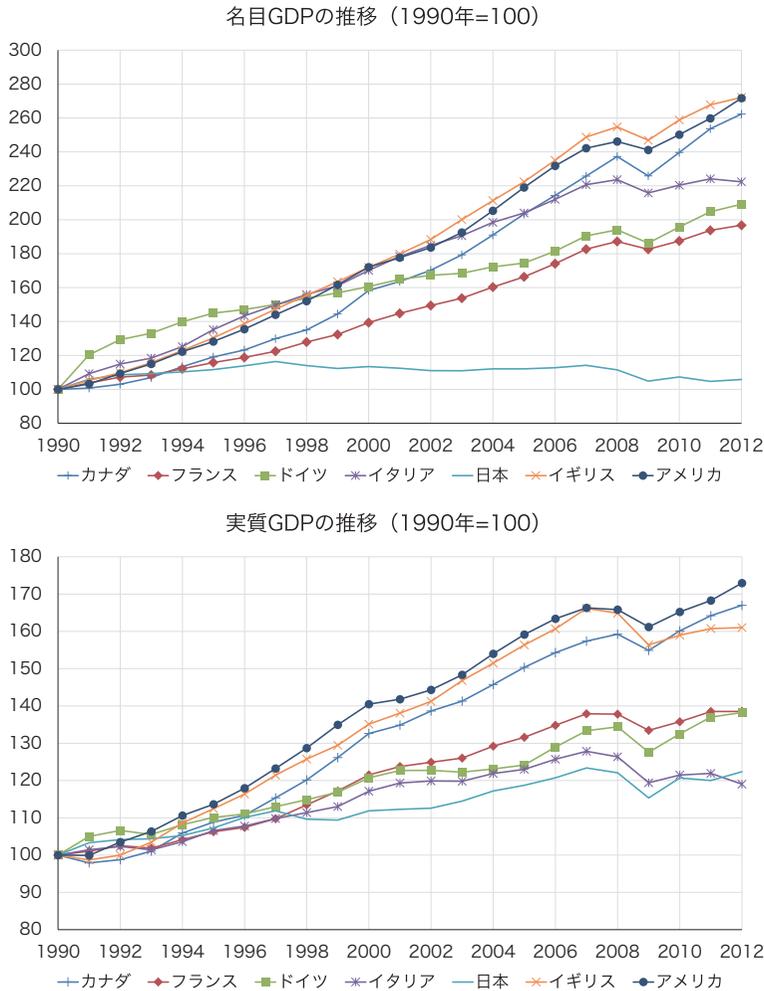


図 1.1 主要国の GDP の推移 (上段: 名目 GDP、下段: 実質 GDP、1990 年 =100、世界銀行「World Economic Outlook 2013」より)

けど。

幽香：あら鈴仙ちゃん、誰に対して議論を先取りするようなことを言ってるのかしらねえ。

鈴仙：え！？ あたし、何かまずいこと言いましたか！？

幽香：何でもないわよ。さてさっき鈴仙ちゃんが挙げたものだけど、「経済成長は必要なか」「そもそももう経済成長なんてできないんじゃないのか」というのは、今の日本の経済をめぐる議論で最も強固なものとしてある疑問ね。

魔理沙：「経済成長を超えた価値観」というものは、日本だとバブルの終わり頃あたりから頻繁に語られるようになり、暉峻淑子^{*3}氏の『豊かさとは何か』（岩波新書、1989年）や、中野孝次^{*4}氏の『清貧の思想』（草思社、1992年。現在は文春文庫）などといったものを皮切りに定期的に出るようになってきている。最近だと、主に若者論の絡みで「経済成長が終わった社会で生きていく若者」に対する擁護論に引き継がれている感じかな。論客で言うと原田曜平^{*5}氏とか古市憲寿^{*6}氏などが挙げられるだろうな。

妖夢：最近はそのような論客が多いわよね。経済が成長しない社会において新しい価値観を持った層にマーケティングすべきだとか。ところで幽香さん、なぜこれが誤解なのでしょう？

^{*3} Teruoka, Itsuko 1928- 経済学者、評論家。『豊かさとは何か』（1991年、法政大学）で博士号を取得。他の著書に『豊かさの条件』など。

^{*4} Nakano, Koji 1925-2004 作家、評論家。著書に『自分らしく生きる』『現代人の作法』など多数。

^{*5} Harada, Yohei 1977- 博報堂ブランドデザイン若者研究所リーダー。著書に『ヤンキー経済』など。

^{*6} Furuichi, Noritoshi 1985- 東京大学大学院総合文化研究科博士課程後期。著書に『絶望の国の希望の若者たち』『誰も戦争を教えてくれなかった』など。

幽香：そんなの、統計を見ればすぐにわかるわよ。図 1.1 に示すのは、世界銀行が集めている名目 GDP の相対的な推移。1990 年を 100 としているわ*7。所謂新興国は除いて、主要先進国のみを記載しておいたわ。

鈴仙：ほんとだ。確かに日本以外は概ねコンスタントに成長してるんだなあ…。

魔理沙：もちろん 2008 年があったリーマン・ショックなどの影響もあって一時期は成長が落ちている時期もあるが、基本的にすぐに持ち直しているぜ。またたまたまに、アメリカとか韓国とかがデフレの危機に陥っている、と言われることもあるが、実際に長期のデフレに「陥った」のは、先進国では残念ながら日本だけだ。

幽香：せっかくだし経済成長に関する疑問についてもう一つ潰しておこうかしら。さっき魔理沙が挙げた論客によく見られるものだけど、「世の中には経済で測れない価値観がある」っていうね。実際問題、最近よく提唱されている「GNH (Gross National Happiness: 国民総幸福量)」というのがあるわよね。

咲夜：1972 年にブータンの国王が提唱し、以来同国で採用されている指標ですわよね。それについては私も知っていますわ。

幽香：ただこの調査にはいろいろ問題も指摘されているのだけど、それについてはあまり触れないこととするわ。ただ一つの事実として、ブータンの幸福度調査の指標を使って、日本の指標を内閣府のアンケート調査から算出したところ、ブータンが 6.1 なのに対して、日本は 6.6 と、日本のほうが少し高くなったの。*8

妖夢：あら、ちょっと意外ですね…。

幽香：経済と幸福度は無関係とは言いきれないのよ。そればかりか、楽しみや愛といった正の感情や、国連の人間開発指数も、一人当たりの実質 GDP とかなり強い正の相関を示しているのよ*9。もちろん経済成長が全てとは言えないのだけど、それでも経済成長が幸福のために重要な一つ、ということが言えるわよね。

1.2.2 大学の数は多すぎるか？ 学歴は無用か？

鈴仙：そういえば、先ほど大学の話が出てきましたけど、教育をめぐる議論って「大学が多すぎる、特に下位の大学が酷い」って話がよく若者論の文脈で出てくるじゃないですか。それって経済学の視点からどうなるんでしょうか？

魔理沙：確かに「最近の大学生は駄目だ」という若者論は定期的に出てくるものだな。最近でも三浦展『下流大学が日本を滅ぼす！』（ベスト新書、2008 年）や、石渡嶺司『最高学府はバカだらけ』（光文社新書、2007 年）といった扇情的なタイトルの本が出てきている。他方で、盛田昭夫『学歴無用論』（文藝春秋、1966 年）などのように、経営者側からも「学歴無用論」は定期的に出ていて、財界の側からも大学のあり方について疑問視されることがよくあるよな。

幽香：そういう問題に対しては、経済学や社会学の立場からは、学歴と階層の問題として捉えられるものね。経済の視点から学歴を考えると、第一に、文化資本などといった構造的な問題をとりあえず捨象して言うと、学歴は階層上昇のために自ら得ることができる数少ない手段として解釈されるわ。理論的には、大学などの高等教育機関に進学することによって、人的資本や社会関係資本を高め、それが階層の上昇に繋がる、というものね。これは学習するという行動に意味を見出すものだけど、片方でシグナリング理論というものもあって、これは「大卒」というアイコンを得ることにより、応募者が仕事に有利になるような能力を非大卒者よりも持っているという情報を開示することができるというもの。前者は社会学が、後者は経済学が立脚することが多いわね。

鈴仙：理論としてそういうのがあるのは理解しますがけど、実際にはどうなってるんでしょうか？

幽香：このことが研究されていないとでも思って？ 確かに社会学の場では、学歴と経済や階層に関する研究が 1980 年代をピークに劇的に減少したことが指摘されているけれど*10、1990 年代以降の経済格差をめぐる議論の中で、経済学、社会学の両面から検証が行われているわ。日本では、大卒者とそうでない層の賃金格差は、1973 年～2003 年の 30 年ほどでは増えていないのだけど、若い世代においてはその格差が急速に拡大しているのよ*11。

咲夜：大学生が増えすぎると、その「増えすぎた」大学生が高卒労働市場を食ってしまい、大卒者の価値が下がってしまい、格差は縮まるとは言われていますけれど、現実としてその格差は広がっているというのが不思議ですわね…。

幽香：咲夜ちゃんでもそのあたりはあまり理解できないようねえ。確かに 1970 年代終わり頃、すなわち大学生が急速に増えていった頃には、確かに大卒者と非大卒者の格差は減少しているわ。でも、その後上昇に転じている。これは産業の知識化、最近だと IT 化が進行して、より高度なスキルが求められるようになったことが背景として挙げられるわ*12。実際のとこ

*7 出典：世界銀行「World Economic Outlook 2013」<http://www.imf.org/external/pubs/ft/weo/2013/02/weodata/index.aspx> から筆者作成。参考：2012 年 12 月 16 日の代官山葛屋書店における「シノドス」シンポジウムの片岡剛士 (Kataoka, Goushi 1972- 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング研究員) 氏の発表。

*8 市川正樹「幸福度は役に立つか？」(大和総研) <http://www.dir.co.jp/library/column/120920.html>

*9 若田部昌澄『もうダメされないための経済学講義』(光文社新書、2012 年) pp.28-33

*10 濱中淳子『検証・学歴の効用』(勁草書房、2013 年) p.15

*11 大竹文雄『日本の不平等——格差社会の幻想と未来』(日本経済新聞社、2005 年) p.145

*12 川口大司「大学生の数は多すぎるか？」(一橋大学経済学部：編『教養としての経済学——生き抜く力を培うために』 pp.55-64、有斐閣、2014 年)

ろ、大卒という学歴の重要性は増えているのよ。

咲夜：なるほど…。

幽香：ついでに社会学の側は、大学での行為の効用について研究しているわ。これによると、大学において専門書を読むという行為などといった「学ぶ経験」を内面化することにより、高卒者などとはまったく違った成長をすることができると結論づけられているのよ*13。経済的な視点を導入すると、「肌感覚」で実感されているようなものとはまるで違った世界が見えるし、そしてそのように見えた世界は構造としての正当性は高いのよ。

燐：大卒という記号にはそれ自体のシグナルとしての効果だけではなく、学習をすることによって地位を引き上げる効果もあるってことっすね。

1.2.3 インフレとデフレ

燐：ところで、あたいが経済についてよくわかんないのは「インフレ」と「デフレ」っすね。インフレになると物価が上がって、デフレになると物価が下がるから、デフレだと物価が下がってモノやサービスが安くなるから生活しやすくなる、っていうのはわかるし、他方でデフレスパイラルとか言ってる、モノやサービスの値段が下がると企業の収益が減って給料も減って生活が苦しくなる、ってのも理解できんこともない。このあたりどうなんすかね？

幽香：あら、その猫さんはインフレとデフレが基本的にどういう現象かについては少しはご存じのようね。

燐：火焰猫燐っす。お燐って呼んでいただければ。

幽香：そう。さて経済について、インフレ、すなわちインフレーションと、デフレ、すなわちデフレーションと呼ばれる現象について簡単に説明すると、

表面的には先ほどお燐ちゃんが言ってくれたことになるのだけど、もう少し正確に言うと、インフレは貨幣そのものの価値が減少し、逆にデフレは増加することを指すわ。そうねえ妖夢ちゃん、なんで貨幣の価値が減少するとモノやサービスの値段が上がるか、わかるかしらねえ。

妖夢：え！？ …えーっと…、貨幣の価値が減少するっていうことは、すなわち今までは100円で100円のものを買えたものが、貨幣の価値が下がると、100円ではかつての90円のものしか買えなくなる、ってことでよろしいでしょうか…。

幽香：大筋で言うとそんな感じだけど、もう少し詳しく説明しておきましょうか。実は妖夢ちゃんの行ったような説明だと、端的には正しいのだけどちょっと筋が悪いのよねえ。というのも、特定の期間、例えば前年の4月と本年の4月について、それぞれのモノやサービスの値段を比べた場合、上がっているものもあれば下がっているものも観測されるのよ。例えば、総務省が発表している平成26年2月の消費者物価指数(CPI: Consumer Price Index)の報告書を見ると*14、2010年平均を100として、2014年2月の物価は、「交通・通信」は103.2なのに対して、「被服及び履物」は96.7と下がっているのよ。それぞれの区分で見れば、上がっているものと下がっているものがあるわ。

鈴仙：確かにそうですね…。じゃあ、どうやって計算するんでしょうか。

幽香：通常用いられるのは、消費者が前の観測時点で購入したものを同じ量購入したときに、どれくらいお金がかかるかというのね。もう少し専門的に説明すると、《消費者が昨年購入したのと同じ財の組み合わせ(バスケット)を今年購入したらいくらかになるのか、を問う》*15ことになるわ。例えば平均的な消費生活を送っている人が、前年の生活費が200万円で、同じ生活をしたら今年の生活費が210万円になったとすると、それは5%のインフレと言うことになるし、また1万円の価値も生活の200分の1から210分の1に下がっていることになるの*16。

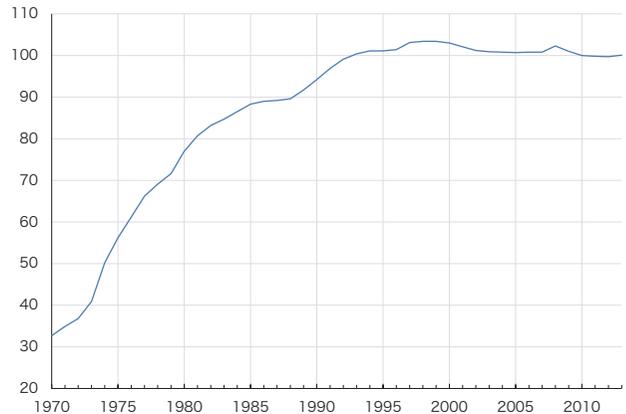


図 1.2 日本の消費者物価指数 (生鮮食品を除く) の推移 (出典: 総務省統計局, 2010年=100)

pp.60-61

*13 濱中『検証・学歴の効用』第1章

*14 消費者物価指数のデータは <http://www.stat.go.jp/data/cpi/sokuhou/tsuki/index-z.htm> 毎月更新される。平成26年2月のデータは2014年4月1日閲覧。

*15 ジョセフ・E・スティグリッツ、カール・E・ウォルシュ『スティグリッツ 入門経済学 第4版』(蔵下史郎ほか:訳、東洋経済新報社、2012年) p.298

*16 この記述については、『スティグリッツ 入門経済学 第4版』p.298のほか、飯田泰之『図解 ゼロからわかる経済政策——「今の日本」「これからの日本」が読める本』(KADOKAWA(角川書店)、2014年) pp.152-154も参考にした

妖夢：逆に、去年 200 万円で生活できていたのが、190 万円になったとすると、それは 10% のデフレになり、1 万円の価値も 200 分の 1 から 190 分の 1 に上がるというわけですね。

燐：しかし、世の中には物価の変動が激しいものもあるんじゃないですかね。例えば食糧品とかは天候とか災害とかにも左右されやすいし。

幽香：そういうのを考慮してできたのが、CPI から生鮮食品を取り除いた**コア CPI** (図 1.2) と、酒類を除く食糧、そしてエネルギーを取り除いた**コアコア CPI** で、実際に経済政策の決定などで使われているのはこちらね。

鈴仙：コアコアって、なんだかこの紅魔館の小悪魔ちゃんがいっぱいいるみたい。

幽香：そう考えなくなる気持ちはわからないでもないけど、コア (Core) っていうのは「中核」っていう意味だからね…。あと、実際のところこういう区分をしているのは日本だけで、通常コア CPI って言うのと、それは日本の「コアコア CPI」に当たるものよ。また、日本の CPI は、実際よりも 1 ポイントほど高めであるということも知られているから、CPI を読むときにはそのあたりも注意してほしいわ。

燐：インフレとデフレの定義についてはわかりましたけど、最終的に政策としてはどういうのを目指すべきなんですかね？

幽香：インフレにもデフレにもどちらもデメリットがあるのだけど、数 % 程度のインフレなら適度な水準と見なされるわ。この水準は、本節冒頭で見たとおり世界的には実現されている水準よね。

1.2.4 「国の借金」で財政破綻はするのか？

妖夢：日本の経済ですと、一つ心配なことがあります。 「国の借金」というのが 1,000 兆円を超えたということが言われてますよね。近い将来財政破綻が来るから抜本的な改革をしなければいけないと言われてますが、実際のところどうなのでしょうか…。

幽香：確かに「国の借金」と称される普通国債・借入金・政府短期証券の残高が 2013 年末でおよそ 1,018 兆円だと財務省から公表されているし^{*17}、公債残高も 2013 年度末には 750 兆円に達すると見込まれているわね^{*18}。ただ気をつけるべきなのは、この「借金」が誰から借りているものなのか、ということ。日本銀行のデータを見ると、その多くは国内の金融機関が持っていることになるわ。

妖夢：それじゃ、日本の国債は多くは国内の人から借りてるってことですか？

幽香：そう。一般の国民も、銀行預金や生命保険などという形で、間接的に国債を保有している、つまり政府に対して債権を持っていることになるわ。実際のところ、このような状態だと、国債をめぐる問題は、財政破綻と言うよりもむしろ再配分政策のほうに悪影響を及ぼすと指摘されている^{*19}。

妖夢：財政破綻については、日本の場合は、とりあえず今はやらなくていい、ってことになるのでしょうか。

幽香：もちろん、今後国債の中で海外の経済主体が持つ割合が増えて、財政破綻が起こるという可能性は否定しきれないけれど、今すぐに財政破綻する、というわけではないわ。ただ「やらなくていい」というのもそれはそれで極端ね。むしろ、再配分政策の障害の除去のためにこそ、財政赤字の是正が必要になるでしょう。一方で財政破綻が起こるのは、内戦などの政情不安や、国債が外貨建てになっていること、そして高いインフレへの対応の 3 つで、他の原因は知られていないようね^{*20}。

	残高
金融機関	6,655,429
中央銀行	938,750
預金取扱機関	3,146,124
銀行等	3,145,857
国内銀行	1,222,467
在日外銀	8,183
農林水産金融機関	251,732
中小企業金融機関等	1,663,475
合同運用信託	267
保険・年金基金	2,221,011
保険	1,893,015
生命保険	1,508,073
非生命保険	58,135
共済保険	326,807
年金基金	327,996
その他金融仲介機関	338,992
非仲介型金融機関	10,552
非金融法人企業	73,390
一般政府	713,142
中央政府	2,816
地方公共団体	7,303
社会保障基金	703,023
家計	242,126
対家計民間非営利団体	35,232
海外	356,264
一般政府・負債	6,907,775

表 1.1 国債・財源債の資産保有残高 (出展：日本銀行「資金循環」 <http://www.boj.or.jp/statistics/sj/>)

*17 http://www.nikkei.com/article/DGXNASFS1001Y_Q4A210C1EE8000/

*18 <http://www.zaisei.mof.go.jp/theme/theme3/>

*19 飯田泰之『図解 ゼロからわかる経済政策——「今の日本」「これからの日本」が読める本』(KADOKAWA (角川書店)、2014 年) pp.147-151

*20 <http://d.hatena.ne.jp/shavetail1/20121224>

妖夢：いずれも日本では起こらなそうなことですね。

幽香：財政破綻を過剰に心配するあまり、経済そのものの活力を失わせる、角を矯めて牛を殺してしまうことがないように気をつけた方がいいかもしれないわね。

1.2.5 経済学は「冷酷」か？

妖夢：これを聞いていいのかわかりませんが…、経済学って結構評判悪くないでしょうか。

幽香：これから経済学の講義に入るのに、この私を怒らせたいのかしら？

妖夢：ご、ごめんなさい！

幽香：あはは、冗談よ。確かに経済学って、一部ではあまり評判がよくないわよねえ。「経済学の犯罪」とか「経済学の終わり」とかの本も定期的に見られるし、経済学に基づく政策が貧困をもたらした、とも言われるし。

妖夢：うー…。とりあえず怒っていないようで何よりです…。ただ、経済学って、経済学者同士でもかなり強烈な批判が交わされていたりしますよね。

鈴仙：そうだよねえ…。経済政策一つ取っても、ものすごい応酬があるし。それに経済学者もまた「反経済学」っぽい本も多く書いてるし。あと経済学がそんなに役に立つツールだったら、なんで不況を予測できないのか、っていう不満もあると思うんだ。

魔理沙：確かにそういう視点から、経済学は「冷酷」とか言われることもあるな。そして、経済学は社会的な視点の違いから、同じツールを元にしても様々な主張が出来、そしてそれが経済学の発展を促してきたという見方もできる*21。ただ気をつけて欲しいのは、経済学に限らず、ほとんどの社会科学で言えることだが、経済学というのはあくまでもツールに過ぎず、全否定も全肯定もされるべきものではない、ということだ。また、これもほとんどの社会科学で言えることで、「いつ失敗が起こるか」の予測なんてものはできんが、失敗から学び、失敗を回避するための手段を考えるということを経済学を学ぶツールとして、経済学は有効だぜ。

幽香：もちろん経済学に対する健全な批判は歓迎されるべきだし、それが行動経済学などといった新しい分野を生み出してきているわ。ただ、やっぱりこれも社会科学全般に言えることだけれど、経済学は決して自分の欲望や願望を全て肯定してくれるものではないのよ。時としては自分の幻想を粉々に打ち砕かれることもあるかもしれないわ。でも、それを乗り越えてさらに広い視座を獲得することこそ、社会科学の醍醐味と言えるんじゃないかしらね。

1.3 ミクロ経済学の基礎概念

1.3.1 経済学的な考え方とは？

幽香：今度は、経済学を学ぶ上で、経済学における基礎的な考え方と概念について見ていくことにしましょうか。

魔理沙：繰り返すが、経済学というものは決して生身の、「生きた」経済をそのまま扱うわけではなく、現実の経済とはいろいろと齟齬をきたすようなモデルを使うことになる。そのため、経済学が「生きた」経済をそのまま扱わない故に、人間の多様な行動、経済活動を扱うことができない、「冷酷」な学問であるというような批判を受けがちであるということは前節で話した通りだ。しかし、経済学などの社会科学は元々社会を一定の「モデル」に当てはめて、その概形を描き出すものであり、また過去からの様々な積み重ねを経て修正されているものだ。だから、個々人の「特殊性」を強調するような議論よりかは、社会全体で見るとは正確性は高いと言えるだろう。

咲夜：そうね。社会学でも、例えば回帰分析などを使って人々の意識や行動に与える要因を測ったとしても、個人差というものはどうしても避けられないわ。それでもなお、意識や行動、環境に対して与える影響についてモデル化するからこそ、社会に対して何らかの施策を提示できると言えるのよね。

鈴仙：魔理沙が言ってるような、社会科学の手法では現れないような人々、あるいは世代の「特殊性」に強調しろっていう議論は、むしろそういう論客が主張する「特殊性」を持たない人たち、おそらく世の中はそういう人々のほうが多いと思うけど、かえってそんな人たちに対して抑圧に働いちゃう可能性が高いよね。

妖夢：その話には同意します。それで幽香さん、経済学的な考え方の根本をなすものというのは、一体何なのでしょう。

幽香：5つあるわ。単語だけ説明しておく、トレードオフ、インセンティブ、交換、情報、分配ね。これは有名な経済学者であるスティグリッツ*22の説明に従うものだけど*23、インセンティブについては後で詳しく説明するとして、そのほかの4つについて説明するわ。まずトレードオフだけけど、これは咲夜ちゃんはわかってそうね。

*21 若田部昌澄『経済学者たちの闘い（増補版）——脱アフレをめぐる論争の歴史』（東洋経済新報社、2013年（電子版））

*22 ジョセフ・E・スティグリッツ Joseph E. Stiglitz

*23 スティグリッツ、ウォルシュ『スティグリッツ 入門経済学 第4版』pp.6-20

咲夜：トレードオフについては存じ上げていますわ。それは、一つのものの消費を増やすと、他のものの消費を減らさざるを得ないというように、資源は無限にあるわけではない、というものですわよね。

幽香：そうね。咲夜ちゃんが説明していたのは消費する側の話だけれど、労働、供給する側でも、例えば資源や労働力の総量が決まっている以上、特定の財を生産すると別の財の生産を減らさざるを得ないわよね。これもそれぞれの財がトレードオフの関係にあるということよ。このようなトレードオフが存在すると言うことは、**ノー・フリーランチ**、すなわち無料で得たり生産したりすることができる財は存在しない、ということなの。

燐：でも、個々人で見ると限りでは、金を支払わないで入手できるものとかあるじゃないっすか。

幽香：そんなのは浅はかな考え方だわ。消費者が出費を伴わず、「無料」で手に入れることができるものにしたって、自然から限りある資源を取っていたり、あるいは広告料などといった具合に他の人が負担しているものがほとんどよ。

燐：あー…、確かに言われてみりゃあそうっすよね…。道ばたに落ちている木の実だって、自然という資源から生み出されるものなの。

幽香：交換については、あまり経済について知らなさそうな妖夢ちゃんやお燐ちゃんでも理解できると思うわ。そもそも有史以前から、人々は物の交換によって利益を得てきたわよね。そしてその交換が行われる場所のことを、経済学では**市場**と言うわ。そして、市場経済においては、交換によって財や資源の効率的な**分配**がなされると考えられているの。また市場の構造を決定づけるのが、交換の意志決定を行う個人や企業などが持っている**情報**ね。

咲夜：スティグリッツがノーベル経済学賞*24を受賞したのも、情報に関する経済学の業績でしたわね。

鈴仙：でも、前の節でも少し触れられてきましたが、一部の経済学者が、市場に任せれば全てがうまくいくとか言っていて、規制を次々と撤廃させた結果貧困が生まれたとか、そういう評価もあって、それが経済学批判として流通してるっていう現状もありますよね。経済学において政府の役割って、どういうものなんでしょうか？

幽香：そのあたりの話は後で話すけど、政府もまた市場における意志決定の行為者として重要な地位を占めているわ。例えば政府による規制が全くないと仮定すると、盗みや借金の踏み倒し、あるいは貸しはがしなどが横行して、誰も交換を行おうとはしないわよね。また産業によっては政府が主要な供給者、購入者となるものも多いし。

燐：市場をめぐる議論ですと、政府が介入することそれ自体を「社会主義」とか言う議論もあるじゃないですか。そういうのはどう考えるんで？

幽香：**社会主義（経済）**とは、言ってしまうえば政府が生産や資源配分、賃金の水準などといった、経済に関するあらゆることを決定してしまうというものを指すのよ。でも、そんな体制がよくまわるためには、とてつもなく優秀な頭脳が必要だと思わないかしら。

燐：おお、まさにそうっすね…。

幽香：既に多くの人が指摘しているけれど、社会主義がうまくいかないのは、決して「結果の平等」を志向したからではないの。ひとえに政府が一元的に、市場に関する意識決定をしてしまうというのが単に不可能というだけの話よ。逆に、これは本章の競争と保護のところ、そしてミクロ経済学のところで詳しく説明するけれど、政府の役割には独占を取り除くなど市場がより効率的に回るためのサポートをするというものも含まれるわ。

魔理沙：だから政府に対して何らかの規制を求めるような言説に対して「社会主義だ！」と批判するのは、的外れなことではかないってわけだ。

妖夢：なるほどね。政府による規制って、単に市場の弊害を抑えるっていうイメージが強かったけど、逆に市場がよりよく働くために行く、っていうものもあるのね。

幽香：そう。だから、市場に対しても、政府に対しても、過度な敵愾心も幻想も抱くのは愚かなことよ。さて、次は市場の種類について説明しましょうか。さっきは市場について、交換によって成り立つ場のことだと説明したわよね。

鈴仙：はい。

幽香：ただ、市場と言っても複数あるわ。私たちが関わることが多い市場は、**生産物市場**、**労働市場**、そして**資本市場**の3つね（図 1.3）。

鈴仙：あ、確かにそうですね。労働者は企業に対して労働というものを提供し、その見返りとして賃金をもらおうし、労働によって得たお金や物で生産物市場から物を購入したりしますね。でも、資本市場ってなんなんでしょう。

幽香：資本市場というのは、資金の調達や、お金の貸し出し、投資などを行う市場のことで、保険などといった、リスクを共有し、分散させる機能まで含む市場のことを指すわ*25。

*24 正しくは、「アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞」。1968年に、スウェーデン国立銀行の働きかけによってノーベル賞に加えられた。

*25 スティグリッツ、ウォルシュ『スティグリッツ 入門経済学 第4版』p.23